

「そんなら甚平はん處へ行つて来る。甚平はん今日は」

「オ、隣りの大将か、マア御這入り」

「ヘイモウ這入つてます」

「ナンヤ這入つて居るのか、鶏籠の後に立つて居るので見えへんがな。此處へ上りんかいなア」

「アノお宅に打盤がおまへんなア、内は打盤があるので足つきにして、おいえへ上りますね」

「足つきがないと上れんが、ヨシ、私が上げてやる、サア一ぶく仕なはれ」

「ヘエ大きに、お宅は火鉢に火が這入つてまへんのか」

「コレ、火鉢に火はたんと這入つてある」

「ケドモ、ねつかから煙草の火が點きまへん」

「それはお前火鉢の横でつけて居るよつてにつかんのや、上へ手を延しんかいな」

「上へ手が届きまへん」

「それなら立ツたら何うや」

「これで立つてます」

「立ツて夫れか、アハ、夫れなら煙草盆へ火を容れてやる、これならつくちやる、併し今日は甚顔の色が悪いが、また嫁はん喧嘩でもしたんやないか、喧嘩はしいなや、あんな貞女な嫁はんは

ないで」

「モウ此頃嬢と喧嘩は廢めて居ます」

「なんでや」

「此の間も嬢と喧嘩して、どたまなくつてやろと思ふて、梯子を取りに行つてる間に、嫁アが逃げて仕舞ひました」

「アハ、コレ嫁はんの頭をたゞのに梯子が無いとたゞけんと言ふ様な無細工な喧嘩を仕ないなア、併し何んで顔色が悪いのや、何處を悪いのと違ふか、用心しいや」

「私もツラ／＼考へて見ると人間が廢めたいのでやす」

「コレ何を云ふのや、人間を廢めると云ふ譯に往かぬが、一體何うしたのや」

「ヘエ、朋友が皆云ひますね。お前は身體が小さいよつてに、雪隠へ行つたら早う臭味が廻るやろ、此の間も川淵で立つて居たら、マゴついて川へ陥りなや、小まん雑魚に喰はれるで、やなんて云はれます。それから人間が嫌やになつてますね」

「コレ、それは朋友が廻りよるのや、小さいと云ふて別に卑下する事はない、小さいのが好いのや」

「小さいのが好へやなんて、あてに辨茶羅云ふて」